



養浩堂叢書

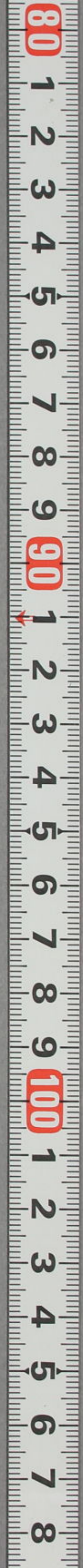
明治十六年
癸未



早稲田大学図書館

文書27

C 22



明治十六年八月



野芥贈伊藤參議一則
答言伊藤參議



野芹

昨年

貴兄歐洲ニ赴クニ當テ送別ノ際一詩ヲ呈シ塩
梅夙具和羹手輔弼須期補袞名ノ句ヲ以テ予
カ期望ヲ表セリ今也兄歸朝ノ榮アリ謹テ一言
ヲ獻ス愚者ノ言請フ試ミ之ヲ一聞センコトヲ
此般歐洲ヨリ

貴兄ノ憲法ヲ取テ歸朝スルヤ人或ハ言フ日本
政府ニ伊藤一家ノ憲法立ツ獨乙一流ノ憲法起
ルト此事貴兄ノ為ニ頗ル惜ム兄ハ則衆望ノ所

屬夙天資ノオヲ抱キ洪鈞ノカヲ備フ然ルニ往
ニ前言世人ノ口ニ出ル或ハ嫉妬偏執ヨリ發ス
ル未タ知ルヘカラスト雖モ予ハ專ラ兄ヲ愛重
スル一人ニシテ兄ノ益ニ光榮赫著ナランコトヲ
希望スルナリ予今兄ノ為ニ謀ルニ兄ノ相談
人ヲ設置スルヲ上策トス今ノ時ニ當リ君側ニ
師傅ナシ政府ニ監察ナシ百般ノ政事ハ内閣ノ
一手ニ出ツ今兄一憲法ヲ立テ一更革ヲ為シト
欲ス内閣中誰カ之ヲ非議スルモノアラン是即
チ一家憲法ノ名アルヲ免レサル所以ナル歟謹

テ惟フ政府辛未壬申以來頻ニ歐米諸國ノ法ヲ
取テ之ヲ政事ニ施ス然ルニ彼國ノ性此國ノ質
ニ反シ彼國ノ情此國ノ理ニ戾リ遂ニ風俗變更
殆レト精神ノ錯亂ヲ來ス兄ノ面前見ル所ナリ
予特ニ希望ス兄若シ此ヲ憂トセハ則吾國固有
ノ慣習ニ因襲シテ不易不拔ノ憲法ヲ起サンコ
ト若シ此事ヲ可ナリトセハ新タニ帝室ト内
閣トノ中間ニ於テ一局ヲ開キ相談人ヲ設置シ
各自意見ヲ十分ニ討議セシムヘシ其人ハ則チ
自ラ兄ノ見ル所アラン予ノ愚見ヲ以テスレ

ハ。今内閣諸臣ノ外ニ世人ノ属望スル所ノモノ
僅々數名アルノミ。黒田ハ内閣顧問ノ位地ヲ占
ム。他ハ伊地知勝副島谷ナリ。次テ後藤吉井亦其
人ナリ。目下板垣大隈ハ黨派ノ動静ニ依テ考慮
スヘキモノ歟。今内閣中ニ其政事才略ノ人ヲ求
ムルニ先ツ長州出身ノ参議ハ兄ト井上ナリ。薩
州ニ在テハ黒田松方ナルヘシ。其他山縣西郷河
村大山山田皆絶群超衆ノ人ト雖モ其所長ハ即
チ陸海軍主任ノ人ナリ。抑モ維新ノ王業ハ吾
輩淺見ニシテ當時ノ大局ヲ洞見スル能ハスト

雖モ其大勢ノ今日ニ到ル所以ノモノハ誠ニ氣
運ノ然ラシムル所。亦薩長ニ藩ノ力ニ出ルモノ
無論西郷水戸大久保諸公ノ功勞ニ賴ル夥多ナ
ルヘシ。今在朝ノ大官ハ皆二藩ノ人ニシテ前諸
公ノ識拔ニ由ラサルハナシ。其他土佐肥前出身
ノ人想フニ皆此範圍ニ出テス。何ソ函嶺以東人
才ノ寡ニ稀少ニシテ在朝ノ人ナキヤ。是予ノ偏
見ニ非ス。天下所見皆然ラン。此他ナシ。薩長二國
ノ王事ニ盡ス。函嶺以東ト異同アル所以ナリ。然
ルニ國家近年不幸ニシテ西郷水戸大久保皆物

故シ。岩倉右府亦隨テ物故ス。維新ノ大勲臣ニシ
テ存スルモノハ。獨リ三條相公アル。予此ヨ
リ以後薩長二國其平均ヲ失ヒ遂ニ分離ノ禍患
ヲ来サシム。恐ル猶幸ニ大政漸ニ緒ニ就ク。雖
然内外ノ大事未タ成績ニ至ラサルモノアリ。若
シ中道ニシテ薩長分離ノ禍アル。此ヨリシテ諸
方各種ノ政黨其虛ニ乘シ紛起勃發一大混亂ヲ
生スルモ亦量ルヘカラス。然ラハ則二十三年國
會開設ノ聖詔モ如何ノ結果ヲ得ヘキ歎憂慮ニ
堪ヘサルナリ。今ヤ

攬

聖上乾剛ノ大德ヲ以テ親シク大權ヲ攬ルノ域
ニ進マセラル。兄今補袞ノ職ヲ盡サント欲セハ
特ニ黑田井上松方諸君ト固結シテ政府ノ根軸
ト成リ前ニ指ス所ノ相談人ト心ヲ協セカヲ竭
シ大政ヲ處理アラシム。希望ス予ハ局外ノ中
立人ナリ素ヨリ政府内外ニ一黨ナシ。然リ而シ
テ兄ニ對シテ肺腑ヲ吐露スル所以ノモノハ兄
ノ十餘年樞機ニ當リテ屈撓セスシテ王事ヲ勤
ムル。即チ予カ多年養フ所ト大ニ感負スル所
アリ。因テ此一則ヲ草シテ謹テ尊覽ニ呈ス。國家ノ

塩梅ヲ調和シテ補袞ノ職ニ當ルハ。我兄ノ責任ナリ。幸ニ他日ノ参考ニ供スルアラハ。何ノ幸カ之ニ過キン頓首再拜。

明治十六年八月二十六日 宮島誠一郎



伊藤參議博文閣下

九月二十日伊藤參議ヨリ書翰来スアリ

宮島誠一郎様

伊藤博文

一寸内閣へ御越可被下候委細御話可申候也

念五

博文

宮島先生

別啓之通宮内省へ申来リ午後内閣へ参リ面會伊藤參議返辭ナリ

御書中全體ノ處ハ誠ニ感佩セリ但シ内閣ト帝室トノ間於テ予カ一已ノ相談局ヲ置テ憲法ヲ審議セヨト敷ク意見不合今日予カ一身ハ帝國ノ執

政大臣即天子執政天子大臣一身
一體之政ヲ執リ政ヲ議ス可シ然ルニ帝室ト内閣ノ
間ニ更ニ局ヲ設ケテ憲法ヲ議スルハ天子大臣疎
隔ノ根源ナリ仍テ今般創立ノ憲法ハ予自ラ奮テ
天子ト共ニ論スルナリ

書中舉クル所ノ人皆是レ一世ノ望ナリ雖然今日久
シク政府ヲ離レ等閑坐視スル政理ノ思想ハ定メテ
秦越ノ觀ヲ為スヘシ吉井ハ我朋友中ノ最モ親ク
所忠愛愛國ノ人ナリ平日共ニ衷曲ヲ語ル必ズ此
局ヲ設ケテ此人ヲ備フルヲ不待伊地知知識見超衆

ナレトモ誠ニ奇ニ過キ人ナリ勝ハ元氣流露應變
ノ才アルモ餘リ飄然ナリ之ヲ要スル目今ノ施政上
其用ヲ求人非ズ唯此輩ノ人ハ皆見レ國家ノ
元老ナレバ皇帝ヨリ必ズ局ヲ設ケテ御優待アリ
臨時ノ御諮問有之様經畫セザル可ラス

予今回歐洲ヨリ歸朝セシ政府ノ協同和順今日
ノ如ク一教セシコトラス黒田ハ内閣顧問ノ職ニ在リ
在廷モ同様ナリ足下イマダ山縣西郷ハ武勲出
身ノ人トシテ知テ彼カ在廷ノ材幹タルヲ不知ク似テ
山縣ハ機ヲ見テ事ニ臨ム周到綿密輕舉重事

ナニ事ヲ執テ勉強倦マハ予ノ所不及西郷好親
詰謔隨意放談其結束之辛如シ雖大事
當テ勤カス其豪膽餘裕アル余ノ最モ力タル所
井上ノ常ニ世人ノ謗ヲ受ク一旦難事ニ遭遇ス突
嗟機敏ニ事ヲ處理ス是レ亦天才ナリ大山ノ足下
ノ熟識今日此輩諸氏内閣ニ在リ協和相謀誠
皇帝ノ幸福ナリ但薩長分裂等ノ事ハ予カ
眼ノ黒キ内ノ足下憂慮ス勿レ
今我ノ獨一人ヲ聘シ往テ憲法ヲ調査シテ縦
今ハ足下詩ヲ作ル如一流一調自己ノ好ミ見ヘシ

我ハ流外ノ人ヲ聚メテ詩ヲ賦セテ欲ス必ス興ニ入ラ
佳詩モ亦不成ナリ余ノ憲法取調ヘモ亦如此不
異猶他日ヲ待テ細論セン

以上伊藤参議ノ答言ヲカ日記ニ記載スルモノ
ナリ

明治十六年癸未十月 誠一郎手記



編集、二十六

